彼女のことが嫌いでも、彼女の無実は知ってください

林眞須美さんは犯人なのか？

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

３月14日、「和歌山カレー事件　噂の深層」と題した集会が東京都内でもたれました。

和歌山カレー事件を御存知でしょうか。１９９８年７月に和歌山市郊外の町の夏祭りで出されたカレーに猛毒のヒ素が混入され、多くの人が急性ヒ素中毒になり、４人が亡くなった惨事です。

★☆★

事件から一ヶ月後、別の事件で保険金詐欺の疑惑を持たれた林眞須美さんの家を、カレー事件も怪しいと、連日マスコミが取り囲むようになりました。プライバシーが蹂躙されることに怒り、テレビカメラに水をかける林眞須美さんの姿が撮影されて、何度も繰り返し放映されたりしたことで、世間はますます彼女がカレーに毒を入れた犯人だと思いこんでいきました。彼女が逮捕され、死刑判決を受けて、「やっぱり」と思った人も多いでしょう。

★☆★

しかし、林眞須美さんは一貫して無実を主張していました。

裁判では事件の動機も解明されていません。「保険金詐欺ならやっても、金にならないことは絶対にしない人だ」と交流のあった人たちは語るそうです。あまり誉められた話ではありませんが……彼女のことが嫌いでも、彼女の無実は知ってください。

彼女の死刑判決が確定してから６年近くがたちますが、彼女は今も大阪拘置所の独房から「私は無実です助けてください」と叫んでいます。

★☆★

林眞須美さんの再審請求で指摘されているのは、彼女がカレー鍋の蓋を開けるのを見たという証言の信用性が乏しいことや、彼女の自宅にあったヒ素とカレーに混入されたヒ素が同一のものだという鑑定は間違っていて、むしろ異なるものであることを示せるということです。

★☆★

集会で、林さんを有罪にした鑑定の誤りが専門家から解説されました。

「鑑定というのは依頼者の意向に添った結論を出しがちです」

「例えば、電車で痴漢をしたとされる男の手から被害者の着衣の繊維が検出されれば、それが証拠にされ

るのですが、実は、周りの乗客全員から同じ繊維が検出できたりするのです」

　予断のもとに行われる「科学」鑑定が、これまでどれほど恣意的に用いられてきたかを考えると恐ろしくなります。

　杜撰な鑑定を批判された学者は「私は、同じ工場で生産されたヒ素であると証明しただけです」と言い訳しているそうです。